CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 23

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）

特集____　リーダートレーニング研究会2020 online
感染症による影響と環境NPOの工夫 *p2*
オンラインで自然観察
作業はしないで田んぼの見学会 **・他** *p3*
連載____　事故事例コラム（６） *p7*

特集　リーダートレーニング研究会2020 online

■はじめに

朝廣和夫　（JCVN理事長／九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門）

皆様、コロナ禍をいかがお過ごしでしょうか。この会誌を年末に開かれるか、年始にお読みいただくか。いずれにしても、2020年は大変な年となりました。巣ごもり生活が増える中で、家族とのひととき、自然や田舎での触れ合いの大切さが見直された一年ではなかったかと思います。

2021年は、コロナ禍が落ち着くことを願い、皆様の晴れやかな年となることをお祈りいたします。

本会につきましても、主に、講座、会誌の発行と、限られた活動の展開ではありますが、取り組みの輪を回していきたいと考えています。引き続き、よろしくお願い申し上げます。

*　　*　　*　　*

さて、JCNVは、2020年10~11月に3回にわたり「リーダートレーニング研究会2020 online」を次の内容で３回実施しました。

1. 感染症による影響と環境NPOの工夫
2. 災害時に求められる農業ボランティア
3. 安全管理の意識を育てる事故事例研究

これまでは対面の研究会やリーダー育成講座を実施してきましたが、遠方の方が参加できないなど展開の制約がありました。今回は、オンラインで行うはじめての取り組みでした。Peatixというイベントサイトで有料の催しとして広報を行い、ZoomというWeb会議システムを用いました。画面を通じた限られた交流の中、会話に耳を集中させながら過ごす一時は、有意義でした。

本誌では、第1回「感染症による影響と環境NPOの工夫」の内容を中心に紹介させていただきます。大人数で集まるのが難しいなか、他の団体はどのような取組をしているのだろうか。ミーティング、オンラインを含め上手に行うには？まずは、JCVN理事４名の取組を紹介します。

感染症による影響と環境NPOの工夫

■オンラインで自然観察

志賀　壮史（JCVN 理事／NPO 法人グリーンシティ福岡理事）

新型コロナウイルス感染症による自粛・休校期間中、NPO 法人グリーンシティ福岡ではオンライン型自然観察会「ZOOM de かんさつ会」を企画・開催しました。目的は休校中の児童がいる家庭に自然体験や気分転換の時間を届けることでした。

しかしフタを開けると、参加者の半分近くが自然学校や NPO、教育関係者の皆さんでした。オンラインでの体験プログラムを広めることができたのは、それはそれでよかったなあ、と思います。

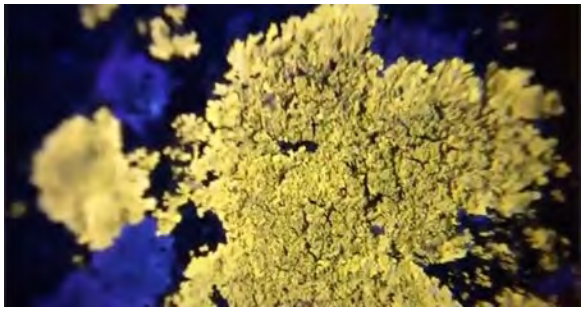
実施概要は以下の通りです。

名　称：ZOOM de かんさつ会
主　催：NPO 法人グリーンシティ福岡
時　期：2020 年 4 月 23 日～6 月 27 日
回　数：19 回／参加組数：376 組
参加費：無料

今回のリーダートレーニング研究会は、夜、暗くなってからの開催でした。なので、実際に「ZOOM de かんさつ会」の第４回「夜のちいさんぽ」で大人気だった光る地衣類をお届けしました。

地衣類とは菌類の体の中に藻類が入った共生体。グリーンシティ福岡の事務所を出て目の前のホルトノキの幹肌にも薄緑色の地衣類がたくさん着いています。

これらのほとんどはコフキメダルチイという名前の地衣。よく見る種類です。しかし、ブラックライトを取り出して照らしてみると…。



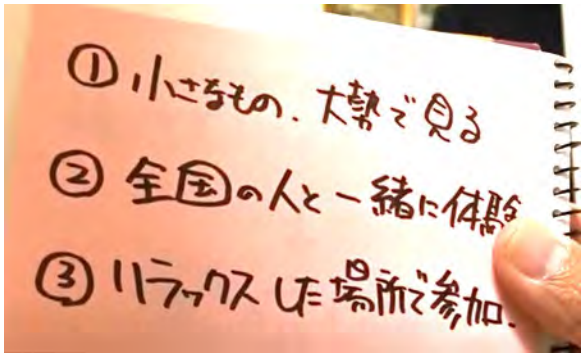
なんと黄金色に光る地衣がいました。この光る地衣はクロボシゴケという名前。強い紫外線を浴びると、そのエネルギーを黄色い可視光にして返す性質があるのです。コフキメダルチイにこっそり紛れ込んでいたのでした。

見過ごしがちなまちなかの小さな自然ですが、よく見ると不思議なことや面白いことがいっぱいあります。

「ZOOM de かんさつ会」では、自粛期間中でも自宅の周りなど、あまり遠出せずに観察したり体験したりすることができる身近な動植物を紹介し、多くの方に楽しんでいただきました。

必須の機材はスマートフォン（iPhone8）とスマホ用スタビライザー（osmo mobile3）。これにモバイル Wi-Fi ルーターと zoom の「プロプラン」を契約しました。加えて、スマホ用マクロレンズやフリップ代わりの小さなスケッチブック＆三脚などがあれば観察会が充実します。手持ちのスマホを使うことができれば初期投資は２万円以内に収めることもできます。

そんなオンライン観察会の特徴は３つあるように思います。１つ目が地衣類をはじめ花の構造、ダンゴムシの足など「小さなもの」を画面の前の大勢の方と一緒に見ることができること。



２つ目が日本全国、時には海外の人と一緒に体験できること。３つ目が、参加者一人ひとりが安全でリラックスした場所で参加でき、お茶を飲んだりメモをとったり、使い慣れた図鑑を手にしたりしながら参加できること。

オンラインでの体験は映像と音声のみになるので、五感を使っているとは言いにくいです。自然観察というには物足りない、もしくは不十分では？とも考えていました。しかし、双方向でおしゃべりしながら見つけたり、終わった後に自分で確認や追体験することで、充実した学びの場にすることができると感じています。

そんなオンライン観察会の特徴を活かしながら、今後も身近な自然を楽しむ場を提供していきたいと思います。

■作業はしないで田んぼの見学会

小森耕太（JCVN 理事／認定 NPO 法人山村塾理事長）

山村塾は農家が中心となって 1994 年に設立され、農山村地域で活動しています。現在、70 組ほどの活動会員が田んぼや山の活動に参加しており、ここ数年は家族の参加が増え、田んぼや山の活動がとても賑やかになっていました。コロナ禍における会の取り組みとして、まず、3 月以降はイベントを全て休止しました。また、5 月は正職員 2 名が半分休業（4 時間勤務）を行いました。この先どうなるか見えなかったこともあり、自分たちの暮らしをゆっくりと整えようという意味もありました。6 月以降は県内の感染数が落ち着いてきたことから、やり方を工夫しながら少しずつ活動を再開しました。具体的な取り組みを４つ紹介します。

■ 取り組み①　田んぼの見学会（6/14、21、7/12）

例年、田植えには 100 名くらいが集まります。大勢での共同作業、農家や会員間での交流が魅力だったのですが、それらが実施できなくなりました。代替イベントして、農作業体験を行わない見学会の定員数を減らして実施しました。

1 日 10 名程度と少人数ではありましたが、参加された方々からは「リフレッシュできた。」「農家の人たちの話をじっくり聞けてよかった。」などと満足度は高かったようです。

■ 取り組み②　山林の手入れ（7/5、7/26）

7 月に入り、感染数が落ち着いてきたことと、山仕事は人との距離を保つことができて安全だよね、ということで、ほぼ通常通りに運営することができました。ただし車を乗り合わせての移動にリスクがあるため、定員は 12 名に減らしました（通常 20～25 名）。久々の山仕事が爽快とたいへん好評でした。

■ 取り組み③　日帰りボランティア

国内外からボランティアを募り実施してきた里山 80 日ボランティア（4/24～7/9、5 名）、台日交流ワークキャンプ（7/16～24、15 名）の 2 つの合宿ボランティア事業を中止し、代替事業として週に 1～2 回の日帰りボランティア活動を行いました。参加者は 1、2 名から 5 名程度の少人数で、5 月末～8 月で延べ 20 日間活動、延べ 59 名が参加し、田の草取りやラッキョウ仕事、田んぼの草刈り作業を行っていただきました。平日開催が多かったのですが、複数回参加される方もいて、心強かったです。農林地の管理に休みはないので大変助かりました。

■ 取り組み④　　オンラインショップ開設

年間予約のお米を毎月届ける笠原棚田米プロジェクトという事業があります。個人会員にはあまり影響はなかったのですが、大口の飲食店が休業状態となり、予約されていた米 40 俵（2400 キロ）が保冷庫から全く動かない事態になりました。オンラインショップを開設して小売り販売するなど地道に売り先を求めたことで飲食店に 600 キロ分の解約を提案することができました。

■まとめ

農山村地域は、来訪者からは安全に見えますが、高齢者が多いこともあり、大勢が集まるイベントは地域の目も気になります。そういった中で事業を実施していくには、公的機関の情報や呼びかけを参考に方針やルールを定め、自らを律しながら活動していくことが大切だと感じました。

マスク着用、消毒、検温などの感染症対策は慣れてきましたが、飲食を伴うイベント、交流会を含むイベントは、なかなか対策の徹底が難しく、悩ましいところです。経営的には活動会員が昨年 74 名→61 名に減少し、NPO 会員や寄付は激減しています。参加費収入は予算の 10 分の 1 以下となり、事業によっては大幅な減収となりました。棚田米などの農産物は売れていますが、人が集まらないと販路が広がりませんので、この状況が続くとなかなか厳しいなという印象です。一方で、自然の中でゆったりと過ごす喜びを再認識したことで、参加人数や活動量の大小で評価しがちな活動を見直すきっかけになったように思います。

■おうち時間とコンポスト

平 由以子（JCVN理事／NPO法人循環生活研究所/ローカルフードサイクリング㈱）

春から夏にかけ長引くコロナ禍、NPO の看板事業である対面式の講座はゼロ、コンポスト回収の休止を迫られました。

わたしたちの堆肥化活動の現場では、農作業などの作業での変化はあまりありませんでした。メンバーの高齢者が多いことからも、縮小しながら推進した一方で、自宅に閉じこもったストレスを発散する場としてはちょうどよかったため、ボランティアさんの満足度は高かったようです。野菜は生きているため作業量が一番多い時期での縮小メンバーでの運営は、特定メンバーを疲弊させました。

地域で実施しているコンポストとコミュニティガーデンを介して生ごみを循環させる LFC プロジェクト（LFC：ローカルフードサイクリングの略）は、対面式のコミュニティを中心としているため拠点回収の休止を迫られ、仕組み自体を大きく変えました。

コミュニティガーデンへ自らコンポストを交換にくる新しいサービスに生まれ変わりました。利用者ゼロになるのではという危機感から何度も話し合いました。これまでも改善の必要性を感じながらも、同じ理由でできなかったことを短期間に具現化しました。課題は山積していますが、現在も前向きな議論を重ねています。

一方で、私たち自身もいつ終わるのかわからない不透明な不安の中、4 月くらいから未来志向型の「育てる楽しみを自分のベランダで」という風潮がでてきました。

コロナの影響で全国的に片付けごみ、家飲み増でビン・カン、そして生ごみが増えました。

家族で自宅で食事をする機会増は、お菓子づくりの人気を上昇させ、コンポストにも予想外の影響がありました。「この機会にコンポストはじめてみようかな」という風にこれまで興味があったけど一歩がでなかった人の背中を押した形になりました。

特に都市向けのバッグタイプの LFC コンポストが人気になりました。この時期、実際にはじめた人の 90%が初心者でした。参入層は、東京の都市部が中心で、20 代～40 代が主でした。このことは衝撃でした。これまでの 50 代～70 代から大きく変化しました。

この 11 ヶ月で 9,000 人の人がコンポストをスタートさせていたことからも、今年はごみが資源化され食品廃棄物が減ったことがわかりました。LINE での伴走を行い利用者は 2000 人までいっています。利用者の声「子どもが喜んでいる」「ごみがごみじゃないことがわかった」「こんな簡単だったら早く取り組めばよかった」など、多く寄せられています。

5 月からオンライン講座を開始し、コンポストや半農都会人講座等を開催してきました。今回は、組織や自分自身へのチャレンジが多かったこと、あたらしい教材や取り組みへの足がかりになりました。

森でリフレッシュプログラム

塚本　竜也（JCVN理事／NPO法人トチギ環境未来基地　代表理事）

トチギ環境未来基地では、4年前から荒れた里山を手入れし、こどもたちが安全に楽しく遊べる里山に変えるプロジェクトに取り組んできました。団体のある芳賀郡を中心に6か所のこどもの里山があります。コロナ禍においても、こどもの里山を活用し今必要な活動を速やかに実施することができました。

2020年３月、コロナウイルスの感染拡大とその影響が広がる中、学校が休校措置になりました。私たちは、宇都宮市内の困窮世帯の子どもたちを支援している活動拠点「キッズハウス・いろどり」と協力し、保護者の方へのアンケートをとりました。すると、

・日中家でずっとひとりぼっち

・給食がないのでご飯がない
・家にずっといて、子どもがスマホばかり。ストレス
・兄弟げんかばっかりしている
・親子関係が悪化、子どもに手をだしてしまいそう

といった声が集まりました。

感染防止に努めながら、休校でも預かり先がない（学童保育にも通っていない）子どもたちを中心に、里山で子どもたちを預かる「森でリフレッシュプログラム」を企画し実施しました。参加したいという声はたくさん届きましたが、密を避けるため、１回あたり5-7人の小グループで実施することとしました。

2020年3月～7月に、21回プログラムを実施し、154人の子どもが参加しました。

助かった、という声も多くいただきました。

●異年齢の子達と、大好きな森や自然でたくさん遊べた事は子どもの精神面、身体面でかなり良い影響があった。

●子供は、ものすごく、リフレッシュ出来て、楽しめました。本当に感謝です。次の時に秘密基地作りの続きをする！っと言っています。

●とても助かりました この状況下ではこどもたちの笑顔がなによりの喜びでした

●外で自由に遊べて、いろんな子たちとすぐに友達になれて、ご飯を作ったり、スタッフの方々とも接することができて子どもも親もリフレッシュできました！

●とても助かりました！お昼も自分たちで作る体験をさせてもらえたこと、自然に触れて遊べたことで気分転換になり、次の日は落ち着いて過ごせたりしていました。何より本人がとても楽しんでいたことも大きかったです。

●今回のプログラムには、本当に救われました。子どもも親もたくさんストレスを感じていたので、お互いに良い気分転換になりました。

里山空間が、子どもたちや、私たちの社会、暮らしを支えるためにできることはたくさんある、ということを実感したプログラムとなりました。

■総合ディスカッション

朝廣　和夫（JCVN理事長／九州大学芸術工学研究院環境デザイン部門）

第１回「感染症による影響と環境NPOの工夫」の４名の話題提供を終え、30 分程度、フリーディスカッションを行いました。全体的には、「コロナ禍で切実な状況はあるけれども、そういう状況を聞くことができて良かった」。という声が多かったようです。Q.&A.方式でまとめてみました。

Q. 森遊びを子供と行う時は密になるけど、工夫はどうしたらよいだろう？

A.　どこまで厳しくするのは本当に難しい。福岡市の公園管理で、公園での感染事例は出ていないという話がある。本来、そこまで厳しくする必要はないのでは。こういうコロナ禍だからこそ、「安全に屋外で過ごせますよ」と、基本的な対策は行った上で、そういう雰囲気作りも大切ですよね。

Q. 里山に子供さんたちにもっと来てもらいたいけど、なかなか、里山活動をしていることを皆さんが知らない。どう、子供さんや、若い人たちとつながることができるのか？

A.　平さんのコンポストバッグは、SNS で 50%の人が新規で入ってきている。デザインも格好よく、コロナ禍による巣ごもり需要という時期的なこともあるけれども、そこにはまった。塚本さんは、繋がるためには、近くにある子供さん方の拠点を訪ね、お話をして、繋がりをつくる、きっかけづくりが大切と紹介いただいた。

Q.経済的に、どの団体も厳しいですよね。

A.　ある団体は、収入が大きく減少してきたことで、ちょーピンチという状況。どこまで耐えられるかという、切実な状況があります。

A. 苦労していますよね。財政的には助成金がコロナについているのでNPO として安定はないで

す。通販はいいけれども、コロナで飛びついた人がどう継続していくかということを、オンラインで支えるようにしています。しかし、労力やお金が Web 関連で多く必要になっています。

Q.様々な、工夫、アイデアを、どのように生んだのか。団体の中で誰が発案して、トップダウンで進めたのか、みんなと話し合っているうちに自然と出てきたのか。新しい人と出会いがあったのか。

A.　どこもミーティングの機会が増えており、話し合う時間が増えているのではないだろうか。その話し合いを、丁寧にできているのかどうかが、大事だと想像している。

Q.リスク管理は日常的に続くが、コロナ禍では、行政のリスク管理の基準が変化していく。基準が厳しくなったりするので、その都度、確認しないと、意味がない。気を付けないと、おかしなことを行っているのかも。

A.　S 氏：活動が終わったらヘルメットを全て水洗いしている。K 氏：今まで洗っていなかったけど、コロナ禍になりハイターを水で薄めて洗っている。T 氏：うちは、ファブリーズです。

S 氏：共有する道具があるから、すごく気を遣う。

T 氏：コロナが流行り始めたころはイベントを中止した。でも、私達の活動場所はシニアの人たちの生きがいみたいなところがあると感じている。通常の会員の方が継続して活動する中で、最初は、みんなマスクをしていたけれど、だんだん、「もう、いいんじゃないか」となり、イベントのコロナ対策を行っているかと言われると、十分にはできていない。

K 氏：リスク管理は、根拠ある情報が提示され、守られているかが大事だと思う。自分たちの決めた根拠で活動するのは良いと思う。それを守るのが難しいところがあるのが難点。

Q.現場活動が一緒にできなくなるから会員と直接会う機会が少なくなる。会員さんが減少する団体もある。ZOOM では会えるけど、一緒にできなくなることは何だろう。ZOOM を使えない人もおり、そこにも格差がある。

A.森に来たり、田んぼに来れることが売り。それをオンラインで代替して、すまされてしまうのは嫌だなと思う。できないなら、できないと割り切った感がある。２月に２週間のキャンプができないか検討を始めた。仕事量は減りますよね。フィールドの管理はやり方を変えていかないといけない。

A.　コロナ禍で参加者を減らさざるを得ない中で、田んぼや山の仕事は待ってくれない。マンパワー不足を確保していくには、近しい人に声をかけて乗り切るしか手がない。次に、どうつなげていくかは皆さんと考えていきたい。

Q.オンラインによるメリットは、どのようなものがあるのでしょうか。

A.　Zoom という Tool を使える人が増えたことで、今までやっていない人、福岡だけでなく広く関われる人が増えたことは、メリットだと思う。循環生活研究所はコンポストの販売ではオンライン講座をしたことで、どこに居住する人でも、購入後に勉強しながらコンポスト活動ができました。コロナ禍だからこそ、みんなができるようになりました。考えるよりも、まず、やってみよう。そういう勢いです。

A.　オンライン観察会も、日本自然保護協会（NACS-J）の人たちが、言い訳と共に話す。「五感を使って学ぶことをオンラインで学べる、という罪悪感がある」と・・・。いくつか考え方があると思われる。遠くて行けないところについて、画像と音声で学ぶことは重要だと思う。グリーンシティ福岡は、そこにあるものを題材に観察する。例えば、「ソメイヨシノの蜜せんを観察します」とか、「どこにでもいる外来種のナガミヒナゲシの種を数えてみよう」とか。リアルの体験ができることの、体験の仕方を紹介したりして。いろんな考え方があるなと思う。

*　　*　　*

ディスカッションでは、オンラインを用いた販売や、講座へのサポート、そして、観察会の活動に対し、「素晴らしい」、「感動した」という声がありました。オンラインへのチャレンジは、すそ野を広げることです。そして、その先に「作業で貢献してみよう」とステップアップに繋がるように、階段を作ることが大切なのかもしれません。

里山でもコンポスト活動でも動植物や人がいて、五感で感じられる現場がしっかりあります。コロナ禍で出会いが制限されることは、やはり大きなこと。現場でしかできない仕事、サービスの賄は大きな課題と確認できました。一方、新たなオンラインや商品の開発、サービスの提供は、新たな繋がり・広がりが創出されていました。まだまだコロナ禍は続きそうですが、これからの展開が期待されます。

連　載

■事故事例コラム（６）

志賀　壮史（JCVN 理事／NPO 法人グリーンシティ福岡理事）

安全管理意識を高めるために、活動に関連する「事故事例」を収集することをお勧めしています。NPO 法人グリーンシティ福岡で 2020 年 7～9 月に収集した事故事例をご紹介します。

＊　＊　＊　＊　＊

7/9 古いやかんにスポーツ飲料で食中毒

（毎日新聞　2020 年 7 月 9 日 10 時 31 分）

臼杵市の福祉施設でやかんのスポーツ飲料を飲んだ 70～90 代の男女 13 人に食中毒の症状。

8/5 毒キノコ食べ男性が死亡

（下野新聞　2020 年 8 月 6 日 9 時 33 分）

栃木県日光市の 80 代男女が毒キノコを食べ食中毒。男性が搬送先の医療機関で死亡した。

8/17 鳥取砂丘で観光客が熱中症で死亡

（日本テレビ系　2020 年 8 月 24 日 1 時 06 分）

鳥取市の鳥取砂丘で 40 代の観光客の男性が倒れているのが発見され、死亡が確認された。

8/19 九大のため池に全裸遺体

（毎日新聞　2020 年 8 月 20 日 10 時 51 分）

九州大学伊都キャンパスの「生物多様性保全ゾーン」のため池で男性の遺体が見つかった。

8/29 福岡市立小学校で 3 人「新型コロナ」感染

（KBC 九州朝日放送　2020 年 8 月 29 日 23 時 21 分）

西区と早良区の小学校で児童 1 人ずつ、別の小学校で 50 代女性 1 人の感染が確認された。

9/7 園児が給食のぶどうを詰まらせ死亡

（NHK NEWS WEB　2020 年 9 月 8 日 15 時 37 分）

八王子市の幼稚園で 4 歳の男児が給食で出されたぶどうをのどに詰まらせて死亡した。

9/14 登山雑誌編集長が遭難し死亡

（西日本新聞　2020 年 9 月 14 日）

福岡県糸島市の井原山で登山雑誌編集長の 50 代男性が死亡。現場は難易度が高いルート。

＊　＊　＊　＊　＊

一つ目の「やかんにスポーツ飲料」は、水道水に含まれる微量の銅成分が原因とされています。ステンレス製のやかんに長年蓄積された銅成分が酸性のスポーツ飲料で溶け出したと見られており、たいへん珍しい事故です。長年使った食器を使う時などは注意したいと思います。

二つ目の「毒キノコ」は例年秋の時期になると報道が増えます。複数の種類のキノコを食べたとのことで種類は特定されていません。完全に種類がわかるものだけを採取するようにしないといけません。

三つ目の「鳥取砂丘」、この日の鳥取市の最高気温は 35.2℃だったとのこと。砂丘の上ではさらに注意が必要な状況だったと考えられます。巡回も行われているそうですが、8 月 1 日～19 日の間で 24 人が熱中症と見られる症状で救護されているとのことです。

五つ目について、続報で大学院生だったことが伝えられました。学内の人間関係などを考えてしまいがちですが、想像でしかありません。対策や教訓めいたことは言いにくいです。

六つ目の「市内小学校での感染」について。小中学校の教室では、どうしても密接・密集してしまうことがあると思います。にもかかわらず小中学校での感染事例がこの程度で済んでいるのは、児童生徒や保護者、学校関係者の努力があるからではないかと思います。

七つ目の「給食のぶどう」の事故、悲しいですが近い事故はこれまでも起きています。ぶどうは皮をむいた状態で 3 つ出されたとのこと。福岡市では直後の 9/10 に「ぶどうは 4 つに切って」等とした通知を市内保育園に出しています。

最後の遭難事故。とても残念ですが、経験豊富な人でもリスクがあると肝に命じなければいけません。長野県内の統計で、例年遭難事故は 60 代以上が最多なのに、今年は 40-50 代で半数近く。自粛期間中にテント泊などに挑戦する経験の浅い中年が増えたのでは？との推測があります。どれだけ経験豊富でもリスクがあることを決して忘れないようにしたいと思います。

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●「オンラインで自然観察」2020年11月、社団法人日本造園学会九州支部「最優秀研究事例報告賞」受賞

JCVNの理事、NPO法人グリーンシティ福岡理事である志賀壮史氏は、2020年11月20日オンラインで開催された社団法人日本造園学会九州支部の研究・事例報告会で、下記の口頭発表をされ、「最優秀研究事例報告賞」に選ばれました。

オンライン型自然観察会におけるインタープリテーションについての考察

この賞は、同会の研究・事例報告集に掲載された口頭発表18件、ポスター発表25件、合わせて43件のA4、2頁の投稿原稿の審査により、１件のみ選ばれるものです。コロナ禍の中で、オンラインという限られた対話の世界の中で、より身近に、自然の驚きを伝える新たなインタープリテーションの可能性を開いた点について、高く評価されたものです。おめでとうございました。自然観察会の概要は本誌にも紹介いただいており、ぜひ、お読みください。今後の展開が期待されます。

●「まちなか里山事業」ボランティア募集

福岡市営地下鉄「桜坂駅」を降りて数分。南公園で森のボランティア活動やってます。

詳しくはQRコードか下記URLまで。

http://www.greencity-f.org/article/16165341.html

主催：まちなか里山事業実行委員会
（NPO法人グリーンシティ福岡＋福岡市植物園・みどり運営課）

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

- 個人正会員（¥10,000／年）
- 個人賛助会員（¥5,000／一口以上）
- 団体正会員（¥20,000／年）
- 団体賛助会員（¥10,000／一口以上）

［会費・寄付振込口座］

番号：０１７６０－９－１２２４０７

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS　２３
■発行日：2020年12月23日
■発行頻度：年3回
■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：ＪＣＶＮ）
■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org